

# 国語学習个体史の研究

— 蒲池美鶴『新版 わたしは小学生』（1・2年生）を中心に —

渡辺春美（京都ノートルダム女子大学）

## はじめに—問題の所在

本稿では、蒲池美鶴『新版 わたしは小学生』を対象として、学習者のことばの学びにおける成長と発達の可能性を、学習个体史<sup>1</sup>の方法を用いてとらえたい。国語科において学習指導を効果的に行うためには、学習者のことば学びの成長と発達の可能性を縦断的にとらえることが必要である。本研究は、そのための基礎研究として意義が認められる。本稿は、その一環として、本書における蒲池美鶴の1・2年生時の文章（日記）を対象として、その特色をとらえたい。

本稿で全学年を一括して対象にすることは困難であり、今後は、3・4年、5・6年生時の文章（日記）を参考にして考察を進めていくことにしたい。以下、著者蒲池美鶴と本書刊行の経緯を紹介した後、考察を進めることにする。

## I 蒲池美鶴の紹介

1951（昭和26）年9月13日に松山市に生まれる。1958年4月、松山市立三津浜小学校に入学、編入試験を受けて1960（昭和35）年9月1日から愛媛大学教育学部附属小学校に編入している。4年生の1961年11月に「もぐらの観察」で小学館主催第10回全国児童生徒作品コンクールにおいて、総理大臣賞を受賞している。1964年4月、同中学校入学、1967年4月、愛媛県立松山東高等学校入学、1970年4月に愛媛大学人文学部入学した。その後、1973（昭和48）年7月末から、サンケイ・スカラシップによって1年4カ月にわたってヨーロッパに留学し、ロンドン（2カ月）をへて、バーミンガム大学でシェイクスピア研究（1年）、西ドイツローテンブルクのゲーテ・インスティテュートでドイツ語学習（2カ月）を行った。1975年3月愛媛大学を卒業後、1975年4月に京都大学文学研究科に入学した。その後、鹿児島大学・東京大学・ケンブリッジ大学客員研究員・連合王国ロンドン大学インペリアルカレッジ・英国仰光国際大学・京都大学を経て立教大学教授となる。現在は立教大学名誉教授である。1999年に博士（文学・京都大学）の学位を取得した。2000年11月に、『シェイクスピアのアナモルフォーズ』（1999年11月 研究社出版）によって、サントリー学芸賞（財団法人サントリー文化財団）を受賞している。

## II 『新版 わたしは小学生』の刊行

### (1) 刊行の経緯

蒲池美鶴は、小学校入学と同時に、継続的に日記や作文を書き始めた。父蒲池文雄は、日記・作文を書いた日記帳（ノート）が5冊ぐらいたまると、題名をつけて、「表紙はきれいな絵の切り抜きな

どで飾り、扉には、その日記の内容と関連のある写真を貼って1冊に製本していった。この合本の日記帳は、4年生の終りに17冊になった。これは、「作文意欲を長続きさせるのに役立った」と述べている。他に大人の日記帳2冊、日記を書いた小さな手帳1冊がある<sup>\*2</sup>。

また、これらとは別に、蒲池美鶴が1年間に書いた文章からいくつかを選び、「すべて原文のまま」、自分で原紙を切り「みつるの日記」という文集を作っている<sup>\*3</sup>。2年生の終りからは、「みつるの文集」と改題し、6冊が作成されている。これは、「一年間日記を書いてきた娘をほめてやり、はげましてやるため」であり、また、「こどもの文章表現力の発達について関心を持っているので、自分の娘の作文をもとにして、一つの研究資料を作っておきたい」<sup>\*4</sup>という思いがあったからでもあったことを、蒲池文雄は明らかにしている。

これらには、蒲池美鶴の日記・作文約800編が書かれており、そこから、ローマ字日記を含む77編が選ばれて『新版 わたしは小学生』<sup>\*5</sup>として刊行されたのであった。77編を選ぶに当たっては、「こどもの心と表現力の発達をたどる上で大切な作文、その学年、その時期を、何かの意味で代表するような作文は、できるだけ掲げるようにしました。」<sup>\*6</sup>と述べられている。

## (2) 刊行の意図

刊行の意図について、蒲池文雄は、次の4点を挙げている<sup>\*7</sup>。

- ①生活綴り方の指導は、田舎の貧しい境遇のこどもに実を結ぶとされがちだが、都会の普通の境遇でも実を結ぶ可能性を実証する。
- ②一人のこどもの1年生から6年生までの作文を一貫して掲げることで、戦後の民主的な、自由な教育を受けた小学児童の表現力と認識力がどのように育っているかを示したい。
- ③こどもの表現力と認識力の発達、心の成長に及ぼす家庭の影響がいかに大きいかを、この1冊で感じ取ってもらう。
- ④本書に「ローマ字作文集」(15頁分)を特集し、指導者が熱意と適切な方法によって指導すれば、こどもが漢字かなまじり文におとらぬ内容を書く能力が育つことを知ってもらう。

## Ⅲ 考察の方法

### (1) 資料

蒲池美鶴『新版 わたしは小学生』(1978年6月 青葉図書)

この内、『新版 わたしは小学生』における1・2年生の時の日記・作文は、以下の【表1 1・2年生の時の日記・作文】の通りであった。

【表1 1・2年生の時の日記・作文】

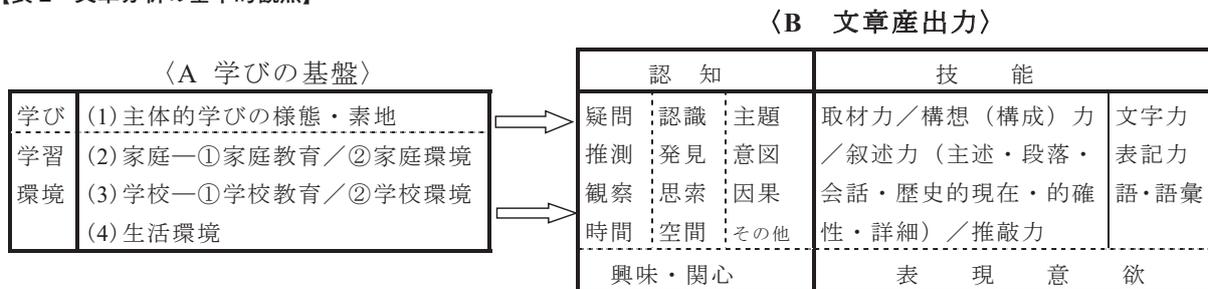
1年生		2年生
[1学期] ①四月八日のにつき ②かあちゃんのびょうき ③てつじょうもうくぐり ④四月二十三日のにつき ⑤六月二十三日のにつき ⑥兄ちゃんのびょうき ⑦七月三十日のにつき ⑧八月十日のにつき ⑨えいが「けがれなき いたずら」 [2学期] ⑩みつるの 人ぎょう ⑪おべんとう	⑫学校のおともだち ⑬すきな子 ⑭おしうり ⑮はっぱの こうさく [3学期] ⑯かみ ⑰つづり方兄だい	[1学期] ①こう太子の ごけっこん ②かあちゃんの パック ③未明と アンデルセン ④くだものやごっこ ⑤空を とべたら [2学期] ⑥山田君が けんかしたこと ⑦ポチ ⑧らくせいしきの おちゃわん [3学期] ⑨さいみんじゅつ ⑩大きくなったら

(2) 方法

先行研究における文章分析の観点<sup>\*8</sup>を、文章を産出する基盤としての〈A 学びの基盤〉-「学び」・「学習環境」、および〈A 学びの基盤〉によって育てられる〈B 文章産出力〉-「認知」・「技能」、およびそれぞれの「認知」と「技能」とを支える「興味・関心」・「表現意欲」に整理・分類し、構造化して、次の【表2 文章分析の基本的観点】のとおりを設定した<sup>\*9</sup>。

以下、まず、【表2】の、〈A 学びの基盤〉の「学び」・「学習環境」に基づいて、蒲池美鶴の学びの基盤を略述する。ついで、〈B 文章産出力〉の「認知」・「技能」のそれぞれの観点をを用いて蒲池美鶴の文章に考察を加えることにする。

【表2 文章分析の基本的観点】



IV 蒲池美鶴の学びの基盤

(1) 家庭

家族は、蒲池文雄夫妻、兄、美鶴の4人である。父の蒲池文雄は愛媛大学教授であった。母親は、主婦、1年間小学校の教師を務めた経験がある。蒲池文雄は、「美鶴の作文力とか表現意欲を育てた家庭的要因」について、次のとおり4点を挙げている。

①読書する環境—本以外には見るべき家具類がなく、蒲池美鶴は、母親から絵本を読んでもらったり、兄の読むのを見聞きしているうちに字を覚え、いつの間にか本好きになった。蒲池文雄は、その「読書態度が、作文力の基礎となる思考力、判断力を育て、語いを豊かにし、正しい言葉の使い方に習熟

させ（中略—渡辺）段落意識や会話を写す力、あるいは表記の力も、読書によって養われた」<sup>\*10</sup>と述べている。

②家族がよく話しあいを持ったこと—家族は、その日に見聞したものについて、こどもたちを中心に、よくみんなで話す機会があった。それが、日記の取材や叙述の上で役立った。

③両親が日記の愛読者であったこと—日記が書き上げられると、早速手に取って、読み合い、話し合った。その際も、作文教育の意図をもって批評をするのではなく、おもしろく読み合い、叙述のうまいところをほめ、よい考えの述べられたところは感心しあった。これは、「雰囲気による作文教育」・「(書きたくなるような) 気分を育てる作文教育」<sup>\*11</sup>であった。

④こどもの日記帳を大切にしたこと—先に述べた日記帳の合本作成、文集の作成を行った。これらは、書く意欲の支えになったと考えている<sup>\*12</sup>。

## (2) 主体的学びの様態

書くことに関して、蒲池美鶴は、素地としての書く力と意欲を小学校就学前から持っていた。1956年3月1日（4歳5カ月半）で12場面からなる漫画「うらしまたろう」を書いている。題を書き、3場面で「おかあちんがいないて」と文句を入れ、最後の場面では「しんじやた」「おわり」と書いている。3月2日には、前夜に飛び込んできた雀が翌日急に死んでしまったことについて絵日記らしいものを書き、「あんまりあ**ば**れるからしんでしまいましたか**は**いい**そ**おです**ね**え」（　は鏡文字、　は父母に教えられた文字—渡辺注）と短い絵の説明を書いている。1956年11月3日には、表記上の不備が多いが総字数193字からなる日記を書いている。また、12月19日には漫画「うしわかまる」の1場面に説明を入れている<sup>\*13</sup>。これらは進んで書かれたものである。

また、読書を好み、多くの本を読んでいる。1年生の8月17日の日記には、「みつるは 本ならどんな 本でも あれば あるほど すきです。とうちゃんが 本を かってきて くれると、ごはんを たべるのも いやに なって よむくせが あります。」<sup>\*14</sup>と書いている。

蒲池美鶴の読書の実情については、蒲池文雄が、次のとおりに書いている。

満三・四才が漫画期、(むろん、そののちも読む。〈中略—渡辺〉) 幼稚園に入る前(満五才ごろ)には、小学館の幼年文庫(『ピノキオ』・『ガリバーりょこうき』・『ロビンソンのぼうけん』など、百ページ余りの絵入りの物語)を好んで読み、幼稚園の夏休みころは、前出の『ながいながいペンギンの話』を特に愛読、その他では、東光出版社の『アラビアンナイト物語』・世界おとぎ噺』・『未明・賢治・譲治・広介日本名作童話集』など(各五百ページ余)を好んで読んだ。1年生になってからの本で一番気に入っているのは、あかね書房の『世界児童文学全集』である。1年生の読書量は、手もとにある五月—八月のメモによると、月平均一冊二〇〇〇頁である。(雑誌・漫画等を除く。)

1年生の時の読書の内容は、物語・童話、それに少数の作文の本など、文学的なものに限られているが、その代り、文学的なものだと、兄(当時五年生)の持っている本、借りてきた本にも食指をのぼし、ほとんどこれを片付けるといふ旺盛な意欲を持っていた。(蒲池文雄「父親としての作文教育論」(『国語研究』32号 1959年11月 愛媛国語研究会 26頁)

下線部の「前出」というのは、幼稚園の夏休みごろ、自発的に、いぬい・とみこ『ながいながいペ

ンギンの話』（1957年 宝文館）をノートに熱心に視写した、というものである。これは、文字・かなづかい・カタカナによる表記・符号の使い方を学ぶことにつながった<sup>\*15</sup>。

### (3) 学校

蒲池美鶴の性格をよく飲み込んだ担任の細心の指導と熱心な協力があつた。担任は、忙しい中で日記を丹念に読み、いたわりのある批評を日記に書いた。また、読書好きなのである蒲池美鶴のために多くの本を貸与している。さらに、教室で何度か日記を取り上げて読んでいる。このような配慮が、日記を書き続ける意欲になったと考えられる<sup>\*16</sup>。

## V 蒲池美鶴の作文の実際

次に、蒲池美鶴の日記・作文を取り上げて、【表2】の〈B 文章産出力〉の「技能」と「認知」の要素から、考察を加えることにする。取り上げる日記・作文は、先行研究で考察の対象となったもの、また、書かれた時期、特徴のよく表れてているものを選んだ。

### 1 1 学年時の作文

蒲池美鶴は、小学校に入学した1日目、学校から帰ると二つの日記を書いている。これを機に、1年間で292編の日記文（内、3編は詩）を書いている。

#### (1) 「四月八日のにつき」（1958年4月8日）

①みつるはきょう一ねんせいになりました。きょうは②四月の八か[ようか]です ③このちょうめんはうけもちのこしろ〈古代〉せんせいにももらいました。ほんとうに④やさしいせんせいです。ようちえんの⑤おかだせんせいも⑥'やさしいせんせいです。⑦'おかだせんせいはそつえんしき〈卒園式〉のときに⑧'ないていました。ようちえんじゅうのせんせいが⑨'ないたそうです。それから⑩こしろせんせいにさんすうのちょうめんももらいました。⑪いいせんせいです。⑫一ねん三くみの子がみんな二さつづ〔ず〕つもらいました。みつるも一ねん三くみですきょうしつのかなにはかわいいえなどがはりつけてあります。⑬こしろせんせいはおんなのせんせいです。

〈父のことば〉

入学式の日には、あいにく母親が入院中だったので、わたくしがついて行きました。家に帰った娘は、さっそく机に向かって何か書いていました。それが右の文と、次の「かあちゃんのびょうき」という文です。（最初の文章では句点が二箇所落ちています。）このように、自分から進んで日記を書いたのは、兄（隆文・当時小学五年生）の絵日記を幼い時から見なれていて、まねをしたくてたまらなかったのを、晴れて一年生になった心のはずみにうながされて実行に移したわけですが、「やさしいせんせい」からノートをいただいたことも、一つのはげましになっていると思います。

〈技能〉—「父のことば」にあるとおり、句点は二箇所抜けているが、文末に句点を打つことは理解されている。読点はない。かな遣いが一点訂正されているが、拗音は適切に書かれている。この日記

が書かれたことについて、蒲池文雄が、「文章を作る能力も、表記の力も一応はあり、絵日記や日記文を書いた体験さえもあって、入学直後に日記を書く態勢は一応整っていたといえよう。」<sup>17</sup>と書いているように、「日記を書く態勢は整っていた」といえよう。この日記の構想について、今井誉次郎は、「文を書く前に書こうとすることがらの全体（ばくぜんとした全体）」がつかまれているとした<sup>18</sup>。その上で、1年生になったうれしさと日記を書こうという興味で、下線部①を一気に書き、つづいて、少し考えて②を入れた1文を書き加えたとした。以下は、㉗と㉗'、㉘と㉘'、㉙と㉙'というように「しりとりのような形」でひねり出して書いたと考察している<sup>19</sup>。確かに、構想が整わぬうちに書き出したもので、連想によって引き出されるように書かれている。しかし、漠とした構想ではあるが、構想の主軸は、1年生になった喜びにあるとも思える。それは、①に端的に表現され、それに関するものとして下線部②③④⑤があり、受け持ちの「こしろせんせい」に関する下線部㉗㉘㉙がある。これが想の展開の主軸であり、それが揺れて、卒業時の幼稚園の先生の思い出に派生していると見ることができる。すなわち、傍線部①に関わる連想の主軸が、幼稚園の思い出に揺れつつ文章が展開していると見ることができよう。これは、想の主軸を一貫することになっていない時期の書き方と考えることができる。

他に、二重傍線部の、助詞・助動詞の使い方は適切で、使い方が身につけていると見える。さらに、「ほんとうにやさしいせんせいです。」「いい先生です。」の主語は省かれている。煩わしい主語の反復を避ける感覚が身につけているともいえる。これは読書によって身につけたものであろう。

〈認知〉—1年生になった喜びが主題であるが、下線部③と④に帳面をもらったことが書かれ、③では帳面が主語になっている。喜びは帳面をもらったことに関わり、先生の㉗㉘に書かれた人となりは、帳面をもらったことに関連させて書かれている。1年生になった喜びは、帳面をもらったこと、優しい、いい先生に受け持ちになってもらったことで高まったと考えられる。卒業時の幼稚園の先生の思い出は連想によって派生的に書かれている。

## (2) 「かあちゃんのびょうき」(4月8日)

みつるのかあちゃんは今もうちょうでにゅういんしています。①それでとうちゃんわ「は」かあちゃんのいるせんばというところにかんびょうしにいくのでみつるはせんばのあるまつ山からかよっています。②けれどかあちゃんはあと二三日ぐらいしたらでるというのでもうすこしでうちへかえれるとおもいます。

〈技能〉—副助詞「わ」(は)のかな遣いに誤りがある。他の助詞・助動詞、拗音・撥音は適切に用いられている。3文から構成され、内二つは、複雑な複文になっている。複雑な複文を用いて書く表現力の高さがうかがえる。今井誉次郎は、この文章は、「書こうとすることがらの全体（ばくぜんとした全体）」が認識されたもので、受け持ちの先生に、母の病気を知らせることを意図して書かれたと推測している。そのために、まとまり、すじが通っているとした。内容に関しては、事実を書いた後で、②「けれど」を用いて、これからの見通しを書いて結んでいると述べている<sup>20</sup>。しかし、先生に見せる予定がないことを考えると、この日記は、先生に伝える意図というより、ノートに書くことのうれしさで、先の入学式の喜びの他に材料を求めて書いたものと思われる。二重下線部に、前の事情を理由として後の事情を導く接続詞「それで」を用い、また、二箇所以後の叙述の原因・理由・根拠・動機などを示す助詞「ので」を用いることによって、理由を述べる説明的な文章になっている。したがっ

て、「けれど」を用いて事情の好転を述べているが、それ以下が見通しではなく、文の前半の「かあちゃんはあと二三日ぐらいたらでる」という事実に基づいて、見通しがなされているものと考えられる。〈認知〉一母の病気（盲腸炎）による入院と帰宅の見通しが日記の中心である。母の入院に関する事象が、二重下線部「ので」を用いて、因果関係で整理され、説明的に表現されている。また、下線部①接続詞の「それで」を用いて、前述のことがらを理由として、あとに導くことがなされている。さらに、②「けれど」を用いて、前述のことがらと異なる認識（見通し）が、根拠となる事実をもとに書かれている。

### (3) 「兄ちゃんのびょうき」(7月18日)

ゆうがた 兄ちゃんが びょうきになったので おくすりを、すえ田と いうところへ かいに いきました。でも①「ない」と いわれたので 山田という おくすりやに かいに いきました。㊦さんざんさがして やっとみつけました。その 玉ぐすりは、少し大きすぎました。ちょっと 小さいほうのを かいました。かえって 兄ちゃんに のませようと しました。けれど②兄ちゃんは、玉ぐすりの 大きいのや 中くらいのは「ようのまん」と いって はきだしたりする ④たちなので、せっかく おちやを 口に 入れて、くすりを のもうとしても、おちやを むだに するだけで、ちっとも のみません。かあちゃんは、おこって「なんで ようのまんの。みつるでも こんな おくすり すぐ ㊧きゅっと のんでしまうよ。あんたの へんとうせんは みつるの ばいから あるのよ。」と いいました。あんまり かあちゃんが せめるので、兄ちゃんは ㊨なきべそを かいて いました。かあちゃんが「なにを なきよるん、この おくすりは 一つぶが 百円も するんよ。」と いったら、③「ウン、ぼく、となりの へやへ いって のんで くる。うそを いわせん。ぜったいよ。ゆび きりげんまん。」と、いいました。かあちゃんは、「ほんとかしら。うまいことを いって のんだような ふりするんじゃないかしら。わたしが いって みよ。」と いいました。みて、ほんとうに のんだので、かあちゃんは 兄ちゃんを ほめました。④みつるは、「あんなことで、ほめられるん ええわい。」と おもいました。

この日記の原題は、「みなとまつりと兄ちゃんのびょうき」(前文807字)であったが、前半280字を略し、題も改められている<sup>\*21</sup>。文中の「へんとうせん」は、「のどのあなの意」<sup>\*22</sup>である。なお、題名を付けることに関しては、「七月中旬ごろから(担任の先生や親のすすめもあって)題をつけての作文を書き出した。それとともに、文が長く、しかもはっきりとした中心点があり、構想もまとまったものになっていった。」<sup>\*23</sup>とある。

〈技能〉一最初に文章を方向付ける文はなく、すぐに叙述に入っている。これは前半を削ったためであろうか。全体に分かち書きの日記になっている。文章には、兄・山・田・口・玉・百・円と漢字が使用され、「ウン」に、読書の影響かカタカナが用いられている。また、複文も見えるが、主語・述語、修飾・被修飾に乱れはない。二重下線部のとおり、助詞「ので」を用いて事態の推移を説明的に述べている。下線部㊦㊨には慣用的な表現が用いられ、①には抽象的な語が見える。㊧には擬態語が用いられている。

この日記では、会話が多く取り入れられている。①は、会話か要約か不明である。蒲池文雄は、1年の「六月から七月にかけて、対象をリアルに写す力がまし、文もずっと長くなるにつれて、会話の

分量もまし、写し方も生き生きとして来た。」<sup>24</sup>と述べている。会話は、基本的には、②のように、「主語+会話+といた。」という型に基づいているが、下線部③では、主語が省略されている。この点について、蒲池文雄は、「一年生でも、あまり問答が重なると、適宜言葉を略することを思いつくらしい。」<sup>25</sup>と述べている。この日記が生き生きとしているのは、薬を飲むことをめぐって、なきべそをかく兄と責める母の人物像が浮かびあがるからであろう。母は、妹美鶴と比較して責め、薬の値段を出して責め、兄の約束を信じず疑うという姿が写し出されてリアルであるとともに、ユーモアがある。最後の下線部④では、兄がようやく薬を飲んだことを「あんなこと」と述べ、それでほめられたことを「ええわい」と思ったと書いている点にもユーモアが見える。

〈認知〉一兄の病気をめぐって展開される事態の印象深さが、この表現の主眼であろう。その時間によって展開される事態が象徴的にとらえられ、表現されている。また、兄の「たち」と人物像、母の人物像も象徴的にとらえられている。さらに、「ので」が多数用いられている点を考えると、体験した事象を因果関係で整理してとらえているものと考えられる。

#### (4) 「おべんとう」(11月5日)

①きょう、おべんとうを わすれました。しかたがないので はしって かえりました。かえってみると、とが しまっていて おつかいに いってしまったようすです。どこへいったのかたにもとの おばちゃんに きこうと おもっていると、むこうから おばちゃんが じてんしゃにのってやってきました。みつるが ものまえに いると、じてんしゃが とまりました。②おばちゃんは、「あれ、みつるちゃん。」と いって、「おかあちゃん、おつかいにいくゆうたんじゃけど、さあ、どこへいったんじやろか。」と いいました。そこで じょうを あけてもらって、はいりました。おばちゃんは、「ごはん、ついでがよいか。」と いいましたが、それどころではありません。一時までに いかなくてもならないので、いそいで おちゃわんと おはしを だしてきました。おかずを かんがえて はながつおに しょうかと おもいましたが れんこんにしました。これなら、おしょうゆを かけずに すむからです。ごはんをついで すぐたべました。たべてすんで、よごれものを あらっておこうと おもいましたが あらいおけが あったので その中に つけておきました。ちょうど 学校へいこうとしたときに ③かあちゃんが かえってきました。④みつるの したことを ほめてくれました。そして、⑤「みつる、ワンワンなきよったんかおもった。」と いいました。かあちゃんは、とうちゃんと にいちゃんに みつるのことをはなしました。とうちゃんは、「ほうーすごいんじゃない。」と いいました。兄ちゃんは、あんまり、うれしいかおをしませんでした。⑥ほんとうは、みんな これくらいのことを するのですが みつるは 一人で うちにいたことが ないので、こんなに ほめられて いるのです。

〈先生から〉

いそいでいるときに、よごれものをあらっておこうときのついたところは、たいへんえらいね。

〈技能〉—正確ではないが、分かち書きで書き、読点が打たれている。主語・述語、修飾・被修飾、助詞・助動詞は誤りなく用いられている。数語ながら漢字・カタカナが使用されている。拗音・撥音も乱れない。下線部①の1文によって日記の内容が方向付けられている。内容はそこを起点に展開している。文中、二重下線部「ので」「から」を適切に用い、事態の因果を整理して述べている。本

文は、会話を挟み、無駄のない文章によって展開されている。

会話について、下線部②は、一つながりの会話を二つに分け、～「と 言って」～「と いいました。」とことばをつないで、リズムも生み出している。会話の波線部「ゆう」は、蒲池文雄が「いう」ではないかと尋ねたところ、「それは、ゆうでのうちゃいかんのよ。谷本（注隣家）のおばちゃんが、ゆうゆうて言うたんよ。」と答えたという。蒲池文雄は、そこに「人の会話を写す時には、あくまでもその人の言ったとおりに忠実に書くべきだ、という一年生なりの見識」を看取っている。この文章中の会話は的確に描写されている。下線部③④⑤は、③をうけて④⑤と展開している。③に主語が書かれ、重複を避けて、④⑤の主語は省かれている。ここにも無駄のない文章の展開が見える。

最後の下線部⑥は、この2箇所「～のです」を用いている。前者は皆がすることの強調、後者は、配慮によって褒められたことを強調している。

〈認知〉—1行目を起点として、弁当を忘れたことによって生じた事態を因果関係を整えて形象的に描き出している。主題意識は低く、時間的経過に沿って事態を描き出すことに主眼があると考えられる。会話は、よく観察して的確に描写している。結びの表現からは、自分への配慮があって褒められていることを認識していることが分かる。

## 2 2 学年時の作文

2 学年時の1年間の作文数は97編、ノートにして16冊になったものを3冊に製本している。年度の終り（3月末）に97編から30編を選び「みつるの文集」を謄写版印刷した。2年生からは、草稿を書かせ、親子で話しあい、手を入れさせた上、ノートに清書させている。その結果、ねらい、構想のしっかりした文章が書けるようになった。一方、作文をおくくがる傾向がかなり見られるに至った<sup>\*26</sup>。

### (1) 「かあちゃんのパック」(4月21日)

かあちゃんがへんなものをボールでまぜているので、①「それなん?」ときくと、「パックゆうもんよ。」「どうやってしたん。」ときくと、「こむぎこに玉子の白みにオキシユールをちょっばしまぜたんよ。これをかおにつけるんよ。」美鶴は、おけしょうするんだとおもいましたが、かあちゃんは、「しみにきくんじゃと。」といました。

かあちゃんははじめ手でつけていましたが、②まったくやばんで③こっけいなかおになったのでみんな大わらいしました。④まっ白なものをぬったから⑤まるでふうのところが土人の⑥ように見えました。手ではあまりうまくいかなかったので、とうちゃんがふででつけてあげました。⑦あんまり⑧たっぷりつけたので目のところにねりこがつらの⑨ようにぶらさがって、また大わらいしました。

やっとな⑩べとべとにぬりおわってガーゼをかぶせるとし人〈死人〉の⑪ようになってとても気持ちがいいです。白いものをぬったので少しだけぬらなかつた、目はな、口が、まっ赤に見えました。また、目はひらいてないのにまっ赤にひらけて見えて、よる美鶴のまえに⑫でもあらわれれば、気ぜつし⑬そうなかおになりました。⑭しかし、あとであらってすむと、まえのきれいなかおになったのであんしんしました。

かあちゃんははじめてパックをした⑮のです。

〈技能〉一分かち書きを用いているが、必ずしも正確ではない。文を分節でとらえることは身につけており、適切に句読点を打っているので、分かち書きにする必然性がなくなっている。この日記においても、文章中に「ので」が用いられ、因果関係をとらえて説明的に文章を運んでいる。カタカナ・漢字の使用が少しずつ増えている。

また、この文章では、省略が多くなっている。下線部①は、基本的には、〈美鶴が「それなん?」ときくと、かあちゃんが「バックゆうもんよ。」といった。美鶴が「どうやってしたん。」ときくと、かあちゃんが「こむぎこに 王子の白みに オキシユールを ちょっぼしまぜたんよ。これを かおにつけるんよ。」といった。〉のように書くところが、下線部の主語、述語が省略されている。文中には他にも省略が見えるが、下線部②③では、主語が省略されている。この省略が文章を簡潔にしている。この文章は、描写に優れ、ユーモアをもって生き生きと書かれている。この文章の描写には、波線部㉗㉘㉙㉚のような副詞が用いられ、また、①の形容動詞、㉛㉜㉝の助動詞による比喩、㉞による擬態語を入れ、接続助詞㉟、助動詞㊱によって臨場的なユーモアを出し、場面の形象化を確かにして生き生きとしたものになっている。さらに㉚によって母が初めてバックをしたことを強調している。このような場面を題材とする、取材力の働きにも注目させられる。

〈認知〉—「かあちゃんのバック」をめぐる事態にユーモアを感じ取り、事象の展開の因果関係をとらえて形象化をしている。この文章の中心は、バックをめぐる事態にユーモアを発見し、それを形象化したところに認められる。

## (2) 「らくせいしきのおちゃわん」(12月6日)

①きょうは、しんこうしゃの らくせいしきが ありました。

②かあちゃんは 朝から、

「きょうは たいてい 赤と白の おもちを くれるよ。こんな おめでたい日は、二十年に一、二へんしか ないのに」  
と いていました。

⑦いよいよ らくせいしきが はじまると、校長先生が、ちょうれいだいの上に あがって、  
③「えー、きょうは、やっど 北校しゃが らくせいしました。四年生 五年生の 人々は、よく 今まで 分きょうじょうで しんぼうしてくれました。これから、しん校しゃにはいつでも、気をおちつけて、しっかりべんきょうしましょう。『校しゃはできたが、中のせいとは……』などと いわれないように してください。では、これから 北校しゃの ために、たいへんよくつくして くださった、パーティーエーの 会長さんの おことばがあります。」と ①おっしゃいました。それから パーティーエーの会長さんが いろいろ お話してから、こうかを うたいました。先生たちのさしずで、みんな きょうしつに はいりました。

古代先生は、④「らくせいしきとは 何のことですか。」と 聞いてから、一つのおちゃわんを さし出して、

⑤「これは、らくせいの きねんです。ここに、三つはま小学校、千九百五十九年と しるしてあります。」

と おっしゃって、うしろの 子に ちゃわんを くばらせました。美鶴は 早く 見たいので ㉞うずうず しました。やっど ちゃわんが くばられると、それを いつまでも 見ていました。

そのうちに おかえりに なったので、みんな ハンカチに つつんで かえります。美鶴は ㊤あいにく ハンカチを わすれたので、たった 二まいの ちり紙で、一まいは 中に つめて、あとの 一まいで つつんで かえりました。㊦すると、とちゅうで おもしろいことを 思いつきました。かあちゃんは朝、おもちだとばかり いていました。ちゃわんを つつんだまま さかさにすると、㊧まるで おもちのように 見えます。㊨それで かあちゃんを かついでやろうと、大いそぎで かえりました。

うちへ つくと、おえんから あがって、㊦「かあちゃん、やっぱり おもちもろた。」という、

㊨「それ、みとうみいね〈みてごらん〉。やっぱり かあちゃんは ようしつとろ。」

と、じまんしているので、美鶴は おかしくなって、ちょっと ちり紙を のけると、中から おちゃわんが 出てきたので、とうちゃんも かあちゃんも 大びっくりです。かあちゃんなどは ㊩目をしろくろさせて、わらいながら、

㊨「あああ、おかし。かあちゃんは、さっそく やいてやらないかんと 思とったんよ。」と いました。みんなは しばらく わらいが とまりませんでした。美鶴も、こんなに うまく 人を だましたのは、うまれて はじめてです。しばらくして とうちゃんは あたらしい おちゃを 入れて もって来て この おちゃわんに ついでくれました。とても おいしい おちゃでした。

〈先生から〉

この作文は、あと半分がたいへんよく書けていますよ。ちり紙をちゃわんの中へ一まいつめて、一まいでつつんでかえったところは、ほんとうにいじらしい気がします。ちゃわんをさかさに つつて、おもちのように見せたところは、なかなかとんちがあって、おもしろい思いつきです。それから、おかあさんが、「やいてやらないかんと 思とったんよ。」と いて、家じゅうが大わらいしたりしたところは、ユーモアがあって、たいへん楽しいようすがよくわかります。いちばんおしまい、「とてもおいしいおちゃでした。」のひとことに、心から新こうしゃのらくせいをいいう美鶴さんの気もちがあふれ出ていて、かんしんしました。

この文章について、蒲池文雄は、「読者が、この文を通じて、また、この文が一番好きだと娘が いてることを通じて、こどもの作文の傾向、表現力のもとより、その生活と心、育っている家庭の 雰囲気などを感じ取って下されば、この文をここに引いた目的の大半は達せられるのである。」<sup>\*27</sup>と述べている。続けて、「感想」として、「こどもが落成式の日、お茶わんをもらった喜びを、それだけにしほませないで、小さなちゃわんをもとに、大きな楽しみと喜びを創造し、それを家庭に持ち帰ったその創意工夫は、わが子ながらほめてやりたいと思う。そして、それを、このような文にまとめあげて、後の日まで、この日の感激と楽しさをしのぶよすがとして、われひとに残したことは、それだけ生活を豊かにしたわけで、立派なことだといってよい。」<sup>\*28</sup>と加えている。この「感想」に対して、有富洋は、「美鶴さんが文章表現力を伸ばしていく土台としての生活が豊かになってきていることが指摘されている」ととらえている。生活の豊かさが土台として書く力を伸ばし、書くことが、また、生活の豊かさを創り出していることの指摘である。

〈技能〉—正確ではないが、分ち書きをしている。主語・述語、修飾・被修飾に乱れはない。漢字・カタカナを使用する量が増えている。二重波線部㊦㊧㊨㊩の副詞を的確に用いて、気持ちや事態の展

開を豊かに描き出している。校長と古代先生のことばには、④のような敬語を使用している。また、㉞は、ちゃわんがでてきた時の母の様子を慣用句を用いてユーモラスに描き出している。③の校長のことば、④⑤の古代先生のことばは、よく理解し記憶して書かれている。話・会話をよく観察していることが理解される。この文章の構成については、「起承転結」であることが指摘されている<sup>29</sup>。有富洋は、文章を整理し、「朝のお母さんの話（起）、落成式でおちゃわんをもらったこと（承）、おかあさんがかつぐことを思いついたこと（転）、結び（結）」<sup>30</sup>と構成をとらえている。

この文章は、おそらく、第1文①を書いた時から、構想が見通されていたと考える。下線部②の「かあちゃんは 朝から～とっていました。」から、母が何度か同様のことを言っていたことがわかる。それは、下線部⑥の「かあちゃんは朝～していました。」でも繰り返され、母の思い込みが伏線として強調され、それが母がかつぐことを考えつくことにつながった。母がさらに⑧のように自慢しているところで、どんでんがえしを食わせ、計画は成功する。その時の母のことは、ユーモラスに㉞のように表現している。巧みな展開であるといえよう。これらの構想力・表現力は、読書と日記を書くことから身につけたものであろうが、2年生からは、草稿を書いた後、親子で話しあい手を入れており、その成果とも考えられる。

〈認知〉—「らくせいしきのおちゃわん」という題名がついているが、もちをもらえらという母の思い込みを利用して担ぎ「大びっくり」させたユーモアのある機知が主題であろう。

そこには、状況を見抜く観察力がうかがえる。その観察力は、母の思い込みを見抜いたことにとどまらず、校長の話や担任の話聞き取るところにも現れている。

### (3) 「さいみんじゅつ」(1月24日)

①今日、とうちゃんが さいみんじゅつの本を 買ってかえました。

②この本は、人を ねむらせたり、手があたまにひっついて のかなくなったりする さいみんじゅつの やり方が 出ています。

とうちゃんは ちょっと本を見ていましたが、㉟わらいながら けしゴムや えんぴつなど いっぱいならべて、

「さあ、兄ちゃん、このうち どれかを 一心に思って、とうちゃんの手をにぎってください。とうちゃんが、思っているものを あてるから。」

と いいました。美鶴は、③「そんなのうそだろう。」と見て見していました。④とうちゃんが やってみると、あたりません。美鶴は、④「それみいね〈それみてごらん〉。」と思いましたが、すると とうちゃんは、

「㊱はじめの三、四回は あたらんもんよ。 おわりごろに あたりだすけん、みとってごらん。」と いいます。⑤「ほんとかな？」と 見ていると、しばらくして 兄ちゃんがあてました。とうちゃんは、「やっぱりあたろ。」と、㊲自まんしています。㊳だんだん おもしろそうになってきたので、美鶴も仲間入りをしました。

美鶴と 兄ちゃんが すると、ふしぎによくあたります。美鶴が あてるやくで、兄ちゃんが 思う方になりました。

⑥美鶴がどれにしようかと思って 手を まわしていると、ちょうど まんねんひつの上で 兄ちゃんが かすかに 手を にぎりしめたような気がしました。

⑦思う人の方は、自分の思っているところへ あてる人の手が まわって来ると、思わず

その方を じっと見たり、手を にぎりしめたりするので、思う人は 目を つむることになっ  
ているのです。

美鶴は、

「これとちがいますか？」

と 兄ちゃんに聞くと 兄ちゃんは かおをあげて、びっくりしたように、

「あれ、美鶴どしたん〈どうしたの〉……。おうとらい〈あっているよ〉。」

と いいました。㉗美鶴はとくいいになって、

「あのね、㉘美鶴の手が まんねんひつのところへくると、兄ちゃんが かすかに にぎりし  
めたんよ。」といいました。そして心の中で、㉙「これがさいみんじゅつだな。」と 思いました。

こんどは ほかのじゅつです。紙に 丸をえがいて、たてよこに せんをひきました。そして 五円玉を 糸に ぶらさげて、できるだけ ゆらさないようにしながら、せんの上におぶらさげます。そして、「よこにうごけ」と思うと、手は、じっとしているつもりなのに、しぜんに 五円玉が よこへゆれだしました。「うごけ、うごけ」と 何回でも 思っていると、だんだん大ゆれになって しまいには びっくりするほど ゆれだします。それで こんどは「たてにうごけ」と思うと だんだん ゆれがとまって たてにゆれだします。㉚あまり 思いどおりになるので びっくりして 本をみてみました。本には、「うごけ、うごけと、心に思っていると、いつのまにか しぜんに手までうごきだすのだ。」と 書いてあったので やっとわかりました。

こんどは、さいみんじゅつにかかる人を ねむらせておいて 体をほうのように まっすぐにするじゅつです。

とうちゃんは 美鶴を 前に 立たせて、「かみのもと」を 美鶴の あたまへ ふりかけながら、

「さあ、これが だんだん とけて、あなたの体じゅうに ながれて行きます。すると あなたは いい気もちになって ねむってしまいます。ねむるといっしょに うしろにたおれかかりますが、そのときには あなたは ほうのように まっすぐになって、体が まがらなくなります。」

といって 美鶴の体を なではじめました。美鶴は べつにねむくありませんでしたが、㉛かかったふりをしてやろうと 思って だんだん うしろへ たおれかかりました。とうちゃんが ささえてくれます。とうとう たたみへ ねてしまうと、とうちゃんが まがるかまがらないかをためすために みつるの足を もちあげました。美鶴は できるだけ まっすぐになるように 体も足も いっしょにあげました。

㉜とうちゃんは 美鶴が わざと知っているのを 知ってるくせに、びっくりしたように

「かあちゃん、美鶴 さいみんじゅつに かかったよ。はよ、おいで。」

とかあちゃんをよびました。そして ㉝二人で わらっているのを、美鶴も とうとう㉞「ウフ、ウフ」と、わらいだしてしまいました。

この文章の題材の催眠術は、父としての蒲池文雄が、書くことをおっくうがりだした娘が日記を書くために用意したものとも推測される。

〈技能〉一分かち書きで書かれているが、特に後半は一貫していない。使用している漢字は増えている。

表記には誤りがない。主語・述語、修飾・被修飾も乱れなく整っている。会話文もよく写し取っている。また、下線部③⑤⑨は、「 」を用いて内心（思ったこと）を表している。他にも催眠術の説明の中で「 」を用いて心に念じていることを表しているところが見える。また、⑩には、「 」を用いた引用も見える。波線部㊸には、擬声語「ウフ、ウフフ」が用いられ、吹き出す様子がよくとらえられている。

この文章は、最初の①②の2文によって方向付けられている。構成は、最初が父の行う、催眠術を不信に思いつつ次第に引き込まれ参加し、それが人間の心理を利用していることに気づく場面、次が二つ目の催眠術を試し、その原理を知る場面、最後に、三つ目の催眠術でわざとこぼしたふりをする娘に、それを知って付き合う父を、娘もまた見透かして笑い合っている盛り上がる場面からなっている。

この文章の表現の特徴の一つは、漫画化にあると考えられる。例えば、最初の催眠術の場面では、父が催眠術を楽しげに始める様子が㊶「わらいながら」に表現されている。それを娘の蒲池美鶴は信用していない。実際、④のように父は失敗する。しかし、父は、失敗を打ち消すかのように㊷と言って取り繕おうとする。しかし、催眠術が成功すると、㊸にあるように、自慢する。この父の姿には滑稽観があり、漫画化されて表現されていると見える。あるいは父がそれを演じているともいえる。このユーモラスな父の催眠術が当たり出したところで、美鶴は㊹のようになり、兄とともに父の見せる催眠術に巻き込まれ、盛り上がり、関心を持つにいたる。この漫画化は、三つ目の催眠術に関する場面においても、切り取り方と㊺㊻㊼によってユーモラス表現され、和やかな家族の姿が浮かびあがる。〈認知〉—主題は、催眠術をめぐる家族団欒を描くことにある。三つの催眠術の場面を対象化し、整理して書きまとめ、生き生きと形象化している。下線部③⑤⑨の思ったことを引用したところは、メタ認知によってとらえたものである。

下線部⑥⑧は、兄が一心に思っている物のところで、兄がかすかな動きを見せたところを見抜いたものである。下線部⑦は、兄の動きの心理的な原理で、兄の思っている物を言い当てたことで、⑨のように思い至る。ただ、⑥で書かれた催眠術がなされている時に、⑦にある心理的な原理に気づいているのはやや不自然で、「～となっているのです。」とあるように、本を読んで得た知識をあと付けて、書く時に入れたとも考えられる。2番目に行った催眠術については、⑩のように書いている。不自然なところも一部にあるが、ここには、興味・関心とともに、観察、推測、発見、認知などの力を関連させ、また疑問に対して調べることで、催眠術の心理的原理を認識していることがわかる。認知に関わる諸能力の発達がうかがえる文章である。

## おわりに—考察のまとめ

考察したことを、以下にまとめる。

### 1 学びの基盤

父の蒲池文雄は、美鶴の作文力、表現意欲が、家庭の読書環境や、見聞したことに関する家族の話し合い、また、両親が書かれた日記の愛読者であり、日記帳を大切にすることをによって育まれたことを述べている。このような家庭環境の中で蒲池美鶴は読書好きのこどもとして成長し、書く力と書く意欲を高めていった。学校においても、また、日記を担任が丹念に読み、いたわりのある批評を書き、また、読書好きの蒲池美鶴に本を貸与した。このような環境の中で蒲池美鶴は進んで書き、書

く力と意欲を相乗的に高めたと考えられる。

## 2 産出された文章の特徴

### (1) 1 学年

①技能—1年生になった最初は、主題想の軸を一貫することになれていない時期の書き方が見える。句読点は十分ではないが、助詞・助動詞、拗音・撥音は適切である。主語・述語、修飾、被修飾には乱れがなく、複雑な複文を書くことができる。「ので」「から」「それで」等を用いて場面を整理し、因果を押さえた説明的な文章を書いている。徐々に漢字、カタカナが増えている。また、次第に「会話文」を用いて生き生きとした文章を書き、会話の描写力が徐々に高まっている。また、煩わしい主語の重なりを避け、省略することができるようになっていく。ユーモアのある文章（これは家庭の生活からも感じられる）表現も特徴となっている。

②認知—高い観察力を持ち、会話の再現力も高く、描写力に優れている。根拠を基にした推測、体験した事象を因果関係で整理して把握することができる。日記の中心は、体験の形象化による再現であり、主題は明瞭とはいえない。

### (2) 2 学年

2年生からは、あらかじめ草稿を書き、親子で話しあった後に、手を入れて清書している。これによって、ねらい、構想のしっかりした文章が書けるようになっていった。

①技能—1年生で身につけている表記力・表現力を高めている。カタカナ・漢字の使用量が増加している。言葉の重なりをなくし、省略が多くなっている。副詞、比喩、擬態語、慣用的表現等を場面に即して使用し、気持ちや事態の展開を豊かに描き出し、生き生きと場面を形象化している。描写の確かな会話文を効果的に用い、形象化を確かにしている。また、構成に起承転結が見られるところもあり、場面構成が整った表現を行っている。さらに、場面の切り取り方、その展開に、ユーモアのある漫画化された表現が見える。

②認知—因果で整理して把握し表現している。興味・関心とともに、観察、推測、発見、認知などの力を関連させ、また疑問に対して調べることで、認識を深めていることがわかる。認知に関わる諸能力の発達がうかがえる。また、機知、ユーモアがあり、それが表現を豊かにしている。取材力・表現力が育ち、展開構想のコントロールが表現にうかがえる。

こらからは、さらに、3・4年、5・6年の蒲池美鶴の文章産出の実際を、国語学習个体史として研究し、こどもの文章産出の可能性を探っていくことにしたい。

## 注

\*1 野地潤家『国語教育—个体史—』（1956年3月 光風出版 21頁）

\*2 蒲池文雄「『新版 わたしは小学生』の生まれるまで—『あとがき』に代えて—」（蒲池美鶴著・蒲池文雄編『新版 わたしは小学生』1978年6月 青葉図書 237頁参照）

\*3 \*2に同じ（237・238頁）

\*4 \*2に同じ（237・238頁）

\*5 蒲池文雄「一児童の作文学習の歩み—文集『わたしは小学生』の生まれるまで—」（『国文学攷』1968年7月 広島大学国語国文学会 1頁）に、初版は、1959年9月、くろしお出版から刊行（B6判・全222頁）とある。

\*6 \*2に同じ（239頁）

\*7 蒲池文雄「一児童の作文学習の歩み—文集『わたしは小学生』の生まれるまで—」（『国文学攷』1968年7月 広島

大学国語国文学会 9頁)

- \*8 蒲池美鶴『新版 わたしは小学生』(1978年6月 青葉図書)を対象とした先行研究における文章分析の観点を、有富洋『児童の文章表現力の発達に関する研究』(2008年11月 溪水社)が整理している。
- \*9 渡辺春美「国語学習个体史の研究—2学年時の学習者Mの『書くこと』を中心に—」(『京都ノートルダム女子大学研究紀要』49号 2019年3月 47頁参照)、渡辺春美「学習者Cの就学前期『書くこと』の実態—国語学習个体史の研究—」(『語文と教育』33号 2019年9月 鳴門教育大学国語教育学会 11頁参照)
- \*10 蒲池文雄「父親としての作文教育論」(『国語研究』32号 1959年11月 愛媛国語研究会 26・27頁)
- \*11 \*10に同じ(29頁)
- \*12 \*10に同じ(29頁参照)
- \*13 \*10に同じ(18・19頁)
- \*14 \*10に同じ(21頁)
- \*15 \*10に同じ(20頁参照)
- \*16 \*10に同じ(29・30頁参照)
- \*17 \*10に同じ(29頁)
- \*18 今井誉次郎「主として『文の書き出し』の指導に関連して—みつるちゃんの記事に学ぶこと—」(日本作文の会編『作文と教育』1959年6月 百合出版 65頁)
- \*19 \*18に同じ(66頁)
- \*20 \*18に同じ(66頁参照)
- \*21 \*10に同じ(24頁参照)
- \*22 \*10に同じ(24頁)
- \*23 蒲池文雄「わが子の作文をみつめる」(『国語研究』35号 1960年11月 愛媛国語研究会 28・29頁)
- \*24 \*10に同じ(23頁)
- \*25 \*10に同じ(25頁)
- \*26 \*23に同じ(29頁参照)
- \*27 \*23に同じ(32頁)
- \*28 \*23に同じ(32頁)
- \*29 \*23に同じ(32頁)
- \*30 有富洋『児童の文章表現力の発達に関する研究』(2008年11月 溪水社 138頁)